

令和 6 年 4 月 3 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00953

研究課題名（和文）朝鮮出兵における諸大名の戦う動機に関する研究：大名たちは「なぜ戦ったか」

研究課題名（英文）A Study on the Combat Motivation of Daimyo (Japanese feudal lord) during the War of Bunroku-Keicho (the Japanese Invasion of Korea): "Why did the feudal lords combat?"

研究代表者

津野 倫明 (TSUNO, Tomoaki)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・教授

研究者番号：60335916

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は朝鮮出兵における実戦の指揮官たる諸大名の戦う動機の解明であった。目的達成のために、戦う動機に関する史料を収集・分析し、大名たちは「なぜ戦ったか」を考察した。諸大名の主たる受動的な戦う動機は豊臣秀吉による譴責であり、積極的な戦う動機は改易大名の復権、大名の領土獲得の意欲、秀吉による加増であった。加増に関しては、豊臣政権の直轄地を流用する流用型恩賞が大名にとって理想的であり、その効果は大きかったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の朝鮮出兵研究においては諸大名の受動的な戦う動機の方が注目されてきたが、本研究では積極的な動機にも着目した。その結果、多彩な戦う動機を解明できた。この成果には、朝鮮出兵研究を推進した意義がある。また、流用型恩賞の重要性の提示には、蔵入地研究を活性化させる意義がある。豊臣期の諸大名は、社会的な関心が高い歴史上の人物たちである。ゆえに、その諸大名が「なぜ戦ったか」を提示したことは社会的な意義を有していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to elucidate the combat motivations of daimyos (Japanese feudal lords) who were the actual commanders during the War of Bunroku-Keicho (the Japanese Invasion of Korea). To achieve this goal, I collected and analyzed historical materials related to their motivations and explored why the daimyos combated. The main passive motivation was Hideyoshi Toyotomi's reprimand, and the active motivations were the reinstatement of fired daimyos, the daimyo's desire to acquire territory, and the increase of their territory by Hideyoshi. Regarding increases, the diversion-type reward which allocated from the direct control of the Toyotomi government was ideal for a daimyo, and I think that this reward had a great effect.

研究分野：日本史

キーワード：朝鮮出兵 諸大名 戦う動機 流用型恩賞 復権

1. 研究開始当初の背景

(1) 16世紀末に約30万人が渡海し、7年間も続いた朝鮮出兵(文禄・慶長の役、壬辰倭乱)は未曾有の海外派兵であった。よって、朝鮮出兵研究は日本史学の重要な研究対象である。この朝鮮出兵については、アジアの植民地化というスペインからの衝撃に対する豊臣秀吉の「対抗意識」が出兵の要因であり、出兵で示された日本の軍力は日本征服を断念させたとする学説が話題となっていた(平川新『戦国日本と大航海時代』2018年)。

一方、出兵の究極の目的は明征服と説かれていた(中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』2006年)。この学説を支持する研究代表者(津野)は、日本の軍力が日本征服を断念させた結果を重視し、出兵はEl impacto de Japón すなわち「日本がスペインに与えた衝撃」と提唱していた(津野「朝鮮出兵の原因・目的・影響に関する覚書」(高橋典幸編『戦争と平和』2014年))。

日本の軍力は日本征服を断念させたとする学説の登場は、日本の軍力に対する高い評価を招来した。

(2) しかし、参謀本部編『日本戦史 朝鮮役』(1924年)以降、軍力に関する研究は停滞気味であり、軍力を担った諸大名の戦う動機の解明が推進すべき重要な研究課題となっていた。

(3) そこで、研究課題の核心をなす学術的「問い」として、諸大名が「何を欲して」「異境で」「かくも長く」「残虐なまでに」戦ったのか、つまり大名たちは「なぜ戦ったか」を設定した。この「問い」に関する考察は、指揮官たる諸大名の戦う動機を解明し、軍力の研究における停滞の突破口になると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、朝鮮出兵における実戦の指揮官たる諸大名の戦う動機の解明であった。目的達成のために、戦う動機に関する史料を収集・分析し、大名たちは「なぜ戦ったか」を考察した。

3. 研究の方法

収集・分析の対象史料は豊臣秀吉朱印状・大名間の書状などである。下記の指標により、A〈積極的な動機に関する史料〉・B〈受動的な動機に関する史料〉に分類した。なお、「積極的」の対義語は「消極的」である。しかし、「改易されたくない」といった動機などは「受動的」の方が適切と考えている(津野「文禄・慶長の役における日本の戦意」(2017 One Asia Forum/Korean Studies Lab Conference、2017年))。

A〈積極的な動機に関する史料〉の指標

領土獲得、戦功、加増、本領回復、流用型恩賞

B〈受動的な動機に関する史料〉の指標

「見せしめ」、改易回避、譴責回避、懲罰、渡海忌避

流用型恩賞について補足しておく。豊臣政権の蔵入地(直轄地)を流用する加増があり、研究代表者は流用型恩賞と呼んでいる(津野「文禄・慶長之役諸大名的目的(文禄・慶長の役における諸大名の目的)」(第二届壬辰戦争研究国際ワークショップ、2018年))。例えば、慶長の役で島津忠恒は5万石、加藤嘉明は約4万石を加増された。島津氏らは明への転封を嫌っていたので、流用型恩賞こそ理想的だったと考えられる。

4. 研究成果

発表した論考等に言及しつつ、年度ごとに研究成果を整理する。

(1) 初年度にあたる2019年度はおもにAの収集・分析により、積極的な戦う動機の解明を進めた。また、豊臣秀吉文書収録図書・朝鮮出兵関連図書を購入し、次年度以降も収集と分析を実行しうる態勢を整えた。

史料収集の実施状況は次のとおりであった。8月28日・29日に東京大学史料編纂所において真崎文書などの史料調査(閲覧・筆写)を実施した。11月7日に大阪城天守閣において豊臣秀吉朱印状・山中長俊書状などの史料調査(熟覧・図録入手)を実施した。なお、3月5日・6日に予定していた東京大学史料編纂所における史料調査は、新型コロナウイルス感染症拡大のため中止した。

史料分析は次のとおりであった。順天の戦いに参加した牢人(改易大名)の積極的な動機(本領回復)に関する史料の分析を進めた。牢人のうち宇都宮国綱の積極的な動機的前提となる、改易理由に関する知見を得た。このほかにも積極的な動機に関する諸史料を分析し、以下で述べる

成果をあげた。

研究成果発表の状況は次のとおりであった。①高橋典幸編『中世史講義 戦乱篇』（筑摩書房、2020年）で鍋島氏の積極的な動機（領土獲得）に言及する、「第14講 文禄・慶長の役」を発表した。諸大名の戦う動機に言及する「戸次川の戦いと長宗我部氏の命運」（『日本歴史』第865号、2020年）を発表することができた。

（2）2年目にあたる2020年度はおもにBの収集・分析により、受動的な戦う動機の解明を進める予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により史料調査が実施できなかった（昨年度延期分を含め4回予定であった）。ただし、東京大学史料編纂所データベース等の活用、豊臣秀吉文書収録図書・朝鮮出兵関連図書の購入や文献複写・文献相互貸借、これらによりBの収集だけでなく、Aに分類すべきであるが、改易大名の復権（本領回復とほぼ同義）という動機に関する史料の収集と分析を実行した。

史料収集の実施状況は次のとおりであった。臆病者を成敗する恫喝を記した文禄2年（1593）6月11日付加藤清正条書など消極的な動機に関する諸史料を刊本で把握した。宇都宮国綱や船越景直ら改易大名の復権すなわち積極的な動機に関する諸史料を上記データベース等の活用により入手した。

史料分析は次のとおりであった。宇都宮国綱の積極的な動機（復権）に関する史料を分析し、戦功に関する史料の分析も進めた。また、船越景直の積極的な動機（復権）に関する史料の分析も進めた。

研究成果発表の状況は次のとおりであった。宇都宮国綱の積極的な動機的前提となる改易理由を解明した「宇都宮氏改易の理由」（『戦国史研究』第81号、2021年）を発表できた。

（3）3年目にあたる2021年度はA・Bを補完的に収集し、これらも含むA・Bの分析により、3年間の成果を総括する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により史料調査の実施は1回にとどまった。ただし、東京大学史料編纂所データベース等の活用、豊臣秀吉文書収録図書・朝鮮出兵関連図書の購入や文献複写・文献相互貸借、これらによりおもに改易大名の復権という積極的な動機に関する史料の収集と分析を実行した。

史料収集実施状況は次のとおりであった。『戦国遺文 下野編第三巻』等の史料集を入手し、諸大名の戦う動機に関する秀吉発給文書など諸史料を収集した。11月12日に東京大学史料編纂所において浅井文書・喜連川文書などの史料調査を実施した。

史料分析は次のとおりであった。前年度までの史料収集もふまえ、船越景直の復権という積極的な動機および関連する論功行賞に関する史料の分析を進めた。また、宇都宮国綱の論功行賞に関する史料を収集し、分析した。

研究成果発表の状況は次のとおりであった。仁木宏編著『戦国・織豊期の地域社会と城下町 西国編』（戎光祥出版、2021年）で積極的な動機にかかわる大規模造船に言及する「長宗我部権力の展開と浦戸の拠点化」を発表できた。図録『長宗我部氏とその時代』（高知県立歴史民俗資料館、2022年）で上記の大規模造船の実施を示す史料を解説する「新出の長宗我部元親書状が語る土佐の造船」を発表できた。

（4）3年目にあたる2021年度に3年間の成果を総括する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により史料調査の実施が1回にとどまった。そこで、補助事業期間を延長して4年目にあたる2022年度中に補完的な史料調査を実施し、研究課題を総括する方策をたてた。4年目にあたる2022年度はデータベースの活用などにより、総括的な研究を発表した。その内容は以下のとおりである。

豊臣政権下の諸大名は軍役を果たしうることが大名として存続する大前提であり、朝鮮出兵で戦うことは諸大名にとって宿命であった。しかし、豊臣秀吉自身も懲罰としての動員の発想が示すように出陣を忌避する大名の存在を知っており、こうした大名の存在も事由となり、朝鮮侵攻が進捗しない状況のもとで「見せしめ」のために改易も含む譴責にふみきった。諸大名は「見せしめ」としての改易を回避すべく、「臆病」とみなされないために、さらに敗北を喫しないために戦わねばならなかったのである。譴責は大名にとって「鞭」にほかならず、諸大名の受動的な戦う動機であった。

こうした受動的な戦う動機とは対照的な「飴」にあたる積極的な戦う動機は改易大名の復権、大名の領土獲得の意欲、秀吉による加増であった。船越景直ら「牢人」（改易大名）は領知免許を目指して戦い、景直の場合は宿願を果たした。加藤光泰の例が示すように大名間には領土獲得の意欲がみなぎっており、鍋島直茂の転封型恩賞に対する強い意欲も観察され、蔚山の戦い頃まで九州諸大名の朝鮮への転封が検討されていた。しかし、新領土の獲得は実現しなかったため、秀吉は大名にとって理想的であった蔵入地を割く流用型恩賞を与えるにいたる。

この流用型恩賞に関しては、とくに慶長3年（1598）5月・6月に実施された流用型恩賞の意義

について、受動的な戦う動機と対比させて論じた。そもそも流用型恩賞は諸大名が理想とする「飴」であり、領土獲得を戦う動機とした大名家臣の欲求を満たすことにもなる。慶長3年5月、秀吉は「臆病者」かつ戦線縮小論の提唱者とみなした黒田長政・蜂須賀家政を譴責し、加えて戦線縮小論に同意した早川長政ら軍目付3人も譴責すると同時に、戦線縮小論への不同意と前年7月の巨済島海戦での戦功とを理由に加藤嘉明に流用型恩賞を与え、譴責につながった告発と戦線縮小論への不同意を理由に福原長堯ら軍目付3人にも流用型恩賞を与えた。6月には巨済島海戦での戦功を理由に藤堂高虎・脇坂安治も流用型恩賞を獲得した。5月・6月の流用型恩賞は諸大名が理想とし、とくに当時は渴望する「飴」であり、巨済島海戦の画期的な戦勝の記憶の蘇生、同時期の一連の譴責という「鞭」、これらともあいまって諸大名の戦意高揚に相乗効果を発揮したと考えられる。その後、激戦として名高い泗川の戦い・順天の戦いで島津勢や小西行長らが奮戦して多大な戦果をあげ、島津氏は「五万石」の流用型恩賞を獲得し、行長麾下の船越景直は流用型恩賞により「四千六百四拾七石」を獲得して復権を果たすからであり、行長などは順天の戦い後にも尽きない戦意を示しているからである。慶長3年5月26日の段階でも秀吉は翌年の大規模派兵計画を堅持しており、大規模造船も進捗していたのであり、出兵が失敗に終わった史実を知っているがゆえの結果論的な判断に陥ってはならない。再々出兵の準備や泗川・順天の激戦における諸将の奮戦ぶりからして、流用型恩賞は厭戦気分がみられた諸大名の戦意の再起動装置として作動しており、ここに積極的な戦う動機としての流用型恩賞の意義が認められよう。

史料収集実施状況は次のとおりであった。『尊経閣古文書纂 諸家文書一』等の史料集を入手し、諸大名の戦う動機に関する諸史料を収集した。東京大学史料編纂所のデータベースを活用し、諸大名の戦う動機に関する諸史料を収集した。2月16日、東京大学史料編纂所において済美録・小田部好仲氏所蔵文書などの史料調査を実施した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により遅れていた、この史料調査により積極的な動機の1つである復権に関連する朝鮮出兵終盤から終了後の含む宇都宮国綱の行動が確認された。

史料分析は次のとおりであった。前年度までの史料収集もふまえ、諸大名の積極的な動機と受動的な動機の解明という研究目的を総括すべく史料の分析を進めた。また、積極的な動機の1つである復権に関する史料を分析した。

研究成果発表の状況は次のとおりであった。4年間の成果の総括的な研究として「朝鮮出兵における諸大名の戦う動機」(『海南史学』第60号、2022年)を発表できた。

(5) 上記(4)で述べたように、4年目にあたる2022年度に総括的な研究を発表した。ただし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により遅れていた史料調査により、積極的な動機の1つである復権に該当する宇都宮国綱の行動が確認された。そこで補助事業期間を2023年度まで延長した。

5年目にあたる2023年度は宇都宮国綱の慶長の役と帰国後における復権にかけた行動を明らかにした。また、慶長の役における毛利勢の「組」編成の前提となる小田原攻めにおける軍事行動に関する知見がえられた。その軍事行動に関する学術論文の執筆を進めている。

史料収集実施状況は次のとおりであった。本務多忙により時期は遅れたが、1月30日に東京大学史料編纂所において「梶杜文書」などの史料調査を実施した。

史料分析は次のとおりであった。前年度までの史料収集もふまえ、諸大名の積極的な動機、具体的には復権に関する史料を分析した。また、毛利勢の小田原攻めにおける軍事行動に関する史料の分析を進めている。

研究成果発表の状況は次のとおりであった。「関ヶ原合戦時の宇都宮国綱」(『人文科学研究』第25号、2023年)を発表できた。なお、小田原攻めにおける毛利勢の軍事行動に関する学術論文の執筆を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 津野 倫明	4. 巻 25
2. 論文標題 関ヶ原合戦時の宇都宮国綱	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津野 倫明	4. 巻 60
2. 論文標題 朝鮮出兵における諸大名の戦う動機	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 海南史学	6. 最初と最後の頁 61-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津野 倫明	4. 巻 24
2. 論文標題 船越景直の復権と順天の戦い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文科学研究（高知大学人文社会科学部人文社会科学科人文科学コース）	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津野 倫明	4. 巻 81
2. 論文標題 宇都宮氏改易の理由	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 戦国史研究	6. 最初と最後の頁 13 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津野倫明	4. 巻 865
2. 論文標題 戸次川の戦いと長宗我部氏の命運	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 74-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 仁木宏、津野倫明、本多博之、大澤研一、中西裕樹、新谷和之、中森祥、石井伸夫、大庭康時、坪根伸也、神田高士	4. 発行年 2021年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 275
3. 書名 戦国・織豊期の地域社会と城下町 西国編	

1. 著者名 石畑匡基、津野倫明、清水克行、宮里修、目良裕昭	4. 発行年 2022年
2. 出版社 高知県立歴史民俗資料館	5. 総ページ数 128
3. 書名 長宗我部氏とその時代	

1. 著者名 高橋典幸、佐伯智広、下村周太郎、田辺旬、西田友広、杉山一弥、阿部能久、大藪海、山田康弘、菊池浩、久保健一郎、金子拓、平井上総、津野倫明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 中世史講義 戦乱篇	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------